

「早春の高尾山紀行(5)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

アサギマダラは、気高い美しさを持ったチョウである。かつて日本の「国蝶」を決める時に、オオムラサキと競った実力者だ。美しいだけでなく、何千キロも旅をする、白いハンカチを振ると寄って来るなどの特徴もあり、多くの昆虫ファンに人気が高い。



「アサギマダラ」*Parantica sita* 群馬県嬲恋村

アサギマダラはまた「賢いチョウ」でもある。体に毒を持っているのだ。それも、生まれつき毒を持っているのではなく「毒餌」を食べることで、徐々に毒成分を蓄積するのだ。その毒餌がキジョランの葉である。



登山道の脇にある「丸い穴のあいたキジョランの葉」を片っ端から裏返してみた。そしてついにはいた！



これがアサギマダラの幼虫だ。まだ2齢か3齢の小さな幼虫だが、私にとっては初対面の一瞬だった。普通のチョウの幼虫はモンシロチョウのように保護色を使ったり、アゲハのように鳥の糞やミカンの枝の擬態模様を使い、天敵の目から逃れるものが多い。しかし、アサギマダラの幼虫はあえて派手な色と模様で、姿を目立たせている。露木先生によれば、これは「毒があるから食うなよ！」という警戒色だという。



アサギマダラは幼虫の姿で越冬する。アゲハやモンシロチョウとちがって、非常にゆっくり成長するのだ。葉の裏のこの幼虫も、死んだようにじっとしていた。



時期的にあまり期待していなかった、キジョランの綿毛も見つけた。絹のような光沢で、さすがは「綿毛の女王」である。良いおみやげができた。